

# 昭和40年代(1965)から昭和50年代の 坂田種苗株式会社(現 サカタのタネ)の岩佐元専務取締役との思い出 市川 裕

病気らしい病気もしなかった岩佐さんの思い出を書くことになろうとは、夢にも思わなかった。

鮎屋で「君たちの舌は味も分からないのだから」といいつつ、最上級を食べさせてくださった。そして「江戸前というなら、東京湾のどこで獲れた穴子だ」と主人を困らせていた岩佐さん。天国にも旨い鮎屋があるのか心配。

## 岩佐さんのサカタでの略歴

昭和31年(1956)4月	坂田種苗入社
昭和42年 7月	同園芸部長
昭和47年 7月	同取締役園芸部長
平成 3年 8月	同常務取締役国内卸営業本部長兼園芸部長
平成 4年 8月	同専務取締役国内卸営業本部長

## 岩佐さんは園芸部の全てだった そしてプラスアルファが数多くあった

38年入社の私市川は、園芸部に配属された。当時千葉大卒は渡辺常務、岩佐、阿武、岩佐夫人、片山、後で八代さんが入り、花種子・球根・苗木・園芸資材の国内販売を業務としていた。岩佐さんが園芸部の統括で、なおかつ外国からの新品種の導入、茅ヶ崎(神奈川)、三郷(長野)、長後(神奈川)の各農場での育種の主導に力を入れていた。サカタには花の育種担当は数多くいたが、営業を踏まえた品種の採り上げは岩佐さんの独壇場だったことは間違いないことと知っている。

AAS(オールアメリカンセレクションズ)は1934年のペチュニアF<sub>1</sub>ピクトリアより数多く入賞しているが、岩佐さんの名は出てこない。育成者は育成者として遇されるのは当然だが、私は昭和50年代のその多くは岩佐さんの主導によるものと、信じて止まない。

## サカタ園芸部の岩佐さんの事々

私の入社当時の岩佐さんは饅頭派の“下戸”であった。後年自宅のワインセラーの年代物のワインを誰が予想できたであろう。ワインといえば、岩佐さんがよく読まれていた『美味しんぼ』の第74巻「恍惚のワイン」を思い出す。

岩佐さんらしい思い出は、スイセンの隔離栽培で岩手に出張。帰りの花巻の駅で私が煙草をつけようとしたら

ライターがつかなかった。岩佐さんは走ってキオスクへ。ライターと日本酒の「酔仙」が手許に。帰りの車中、上野まで飲み明かした。

この気遣いはいつものことであり、サカタの主流の「割り勘」を岩佐さんだけ守らなかったことにも通じ、その最終章は平成11年10月16日のホテルオークラの自費による感謝の会へとつながるのである。その話は後章で。

**球根 ダリア**については岩佐さんが、原産地、歴史を全て知る第一人者で、まことに書きづらい。ダリアの口ウ漬をやめ、裸球をポリセロ袋詰め(ミニラベル付)とし、寒冷地の不発芽を解消した。そして50年代には100万球の生産、販売を達成したが、岩佐さんを満足させることではなかった。1袋150円の時代に、3,000円で売れるダリアを夢見ていた。「宇宙」より大きい30cm以上の品種等々であったが、実現できず、誠に申し訳ない結果となってしまった。ダリア協会の方々にお願ひすべきだった。

**グラジオラス** 当時の販売は球根生産地より仕入れて売るのが主流であったが、岩佐さんは自社生産に踏み切った。寒地育成種は長野県、岩手県で、暖地育成種は茨城県で生産。岩佐さんは1リットル60万円の木子を持ち帰り、社員をビックリさせたものだ。

輸入といえばもう一つ。岩佐さんの海外旅行は10年間で36回と記憶している。私は1回もなく、残念だった。

**産地廻り** 切り花生産地が主で、伊豆半島、房州、渥美、高知等を廻り、生産技術を教えられ、営業とはこんなものと教えられた。が、西伊豆では「岩佐が今度来たら、川にぶち込んでやる」という物騒な生産者もいた。岩佐さんの技術指導は、天狗の生産者を上回る技術であったことを物語る。その後何年かで、その天狗は岩佐さんの信奉者となっていた。

**会津若松にヒヤシンス・チューリップの球根生産地を作った。**当時、チューリップは新潟、富山で、切り花用品種であった。百合咲き、パーロット、八重咲きのサカタオリジナル品種の生産が目的であった。福島経済連会津若松支所での球根山揚げ価格の10銭1円の価格交渉が何日にも及んだことも懐かしいが、輸入解禁により生産中止となって久しい。

## 岩佐さんの著書は数多い

私の本棚にあり、今も岩佐さんにお世話になっている本を紹介させていただく。

- ・ 誠文堂新光社刊『最新園芸大辞典』  
執筆者に坂田種苗時代の社員が5名。岩佐さんは写真提供者であった。
- ・ 講談社刊『園芸大百科事典』全12巻  
岩佐さんは編集者、執筆者、写真提供として園芸を生活の中に紹介。
- ・ 講談社刊『アーバンガーデニング 花による緑化マニュアル』  
岩佐さんは編集委員、写真提供。
- ・ アポック社刊『日本花名鑑』  
岩佐さんは編集委員。流通植物の集大成。
- ・ 発行者 坂田種苗株式会社 制作エフ・ジー企画  
『種子に生きる 坂田武雄 追想録』(非売品)  
岩佐さんは編集を担当。なお本文の中で「坂田武雄と坂田種苗株式会社年譜(付・園芸界その他の出来事)」という貴重な年譜を作成された。
- ・ サカタのタネのカレンダー(岩佐オリジナル)  
当初は坂田種苗の園芸部のカレンダーとして作成されたが、後全社のカレンダーとしてお得意様、仕入先様に喜ばれた。私にとっても岩佐さんのオリジナルカレンダーを見て、キューケンホフを見たい、フロリアードも是非見たいとの思いを深めた。後日実現させたことが思い出される。できれば岩佐オリジナルカレンダーの写真集が欲しいと思っている。

## 展覧会・展示会では最高のプロデューサー

各種のサカタコーナーでは、その知識、博学、そして海外経験を十分に活かしたテーマパークであった。

**園芸文化協会** 「花の文化展」、現在の「花と緑のガーデニング博」として開催され、サカタコーナーも趣味の園芸家を楽しませた。

**関東東海花の展覧会** 6日本種苗協会のコーナーに出展。毎年サカタ新品種が営利栽培家の注目を集めた。

△ **家庭園芸普及協会** 「フラワー&ガーデンショー」のサカタコーナーをコーディネート。

EXPO 90(大阪花博・1990)岩佐さんはコンテスト委員、そして日種協の光の館総合プロデューサーとして活躍。サカタにグランプリ賞をもたらした。

**サカタ創立60周年記念 フィールドディ** 昭和48年(1973)長野三郷農場で、花と野菜の合同で開催された。

**サカタ創立70周年記念 フラワーショウ** 昭和58年(1983)小田急向丘遊園内で、盛大な式典とフラワーショウを開催し、出品数1,060種、約20万株。約3万人のご入場があった。内輪の話だが、当時としては大金の3,000万円の企画を、金子社長よりゴーサインをもらって、岩佐さんが実現させたとのこと。

**サカタ創業80周年記念 '93サカタドリームショウ** 平

成5年(1993)静岡掛川総合研究センターに、テーマ「家庭に町に花と緑の大きな輪・ビューティフルにヘルシーに・サカタの華と野菜のパレード」のもと、盛大に開催された。

## 前代未聞の岩佐さんの感謝の会(平成11年)

岩佐さんは平成11年8月27日の株主総会で退任された。岩佐さんの感謝の意を込めた会ということで、岩佐さんの自費で、10月16日ホテルオークラで開かれた。招待者は外国より11名、園芸各界より89名、親族17名の豪華な、後にも先にもない、ものすごい会であった(表現する言葉もない)。和食は“山里”の斉藤料理長に任せ、乾杯はシャンパン(ブリュート・アンペリアル) 飲み物はワインの赤(ラトール) 白(シャブリP・C)

招待状には「宿泊の方はお部屋をご用意」「ご祝儀はご無用」とある。「IWASA YOSHITOU 花華人生50年パーティー」は岩佐さんの感謝以上に盛り上がった。

## 園芸学会園芸功労賞受賞(平成13年)

「花卉産業の発展に対する永年の功労」に対する授与であった。そのお祝いを12名の発起人(代表 濱田豊氏)等により、5月12日「岩佐吉純氏園芸功労賞受賞祝賀会」がホテルオークラで開かれた。園芸功労賞は最も名誉ある賞で、岩佐さんは心から喜ばれていた。そしてまた、岩佐さんの内祝いの宴が催されたのはいうまでもない。

## 岩佐さんの常日頃の言葉「勉強しなさい」

いつでもどこでも勉強といわれていた私は、ついに最後まで守れなかった。岩佐さん、ごめんなさい。

最後の会話となったのは「イチちゃん、200ページの本の編集をできる人を探してほしい」という電話だった。気になってはいたが、その件も名古屋園芸の小笠原亮様が委員会を作り、発刊に向けて第一歩が始まったとのこと。岩佐さん、ご安心ください。

## 岩佐さんのメタセコイア

岩佐邸には一抱えもあるメタセコイアがある。前に住んだ下総中山(市川市)の庭から根回しをして現在の中山(横浜市)に移植したと聞く。なぜか私の家にもメタセコイアがある。私のメタセコイアをお棺の中に入れてもらって。岩佐さんと再会できるように“道標”として。

文中過ぎた言葉がありましたら、岩佐さんどうぞお許してください。岩佐さんを偲んで(7月記す)